

日本語運用力の到達目標とコースデザイン  
—— 十文字学園女子大学留学生別科の事例より ——  
Japanese Performance Level and Course  
Design : Case at Foreign Student Center

小笠原 典子  
Noriko Ogasawara

## I はじめに

平成12年4月の開講時には、総学生数23名、コース数2（初級・中級各1クラス）であった十文字学園女子大学留学生別科も、平成14年秋学期には総学生数104名、コース数8とその規模は約4.5倍に拡大した。スタート当初のように、総学生数が23名、各クラス10名程度の学習者で構成されているというコースは、クラス運営もたやすく、設定された学習目標への到達もそれほど困難がないように見られるであろう。しかし、実際には、当初のクラスでは学習者の日本語力は同一クラス内で3～4段階に分かれており、そのような状況では、各学習者の日本語力に適した授業を行い、全員を定められた到達目標に近づけるという作業は非常に困難であった。その後学習者の増加にしたがい、コース数も最大9コースが設定されるようになり、学習者のそれぞれの各段階にかなり対応できるよう改善されてきたというのが、留学生別科の現状である。

いわゆる「留学生別科」は、外国人留学生が大学に進学し、そこでの学習、研究の助けとなるだけの日本語力を獲得するための予備教育機関であるが、留学生別科が掲げる日本語学習の到達目標とはどの段階を指すのであろうか、また、その目標を達成するための適切なコースデザインとは何であるか、この二点について十文字学園留学生別科の事例をもとに検討を行うことが本報告の目的である。

## II 学習到達目標をどのレベルに求めるか

留学生別科に入学する学生は、課程の日本語を学習した後は大学進学を志望する者がほとんどである。したがって、留学生別科における日本語学習の最終到達目標は、大学課程での専門

---

十文字学園女子大学留学生別科

Jumonji University Foreign Student Center

キーワード：留学生の日本語、学習到達目標、日本語運用力、コースデザイン、配置クラス決定

の学習を支えることができるだけの日本語運用力を獲得することにある。

以下の表は一般成人学習者と留学生の日本語習得の目標をまとめたものである。表1での一般成人学習者と留学生別科生の到達目標において、共通に求められる言語技能は一般的なコミュニケーションを円滑に図るためのものである。両者の違いは、そのまま両者の置かれる環境の差になって現れる。留学生はその後大学で専門知識を獲得することが目標であるため、「話す」「聞く」「書く」「読む」という言語の4技能に関して目標にあわせた学習が必要になる。

表1 学習到達目標

目標/対象	一般成人学習者	留学生別科学習者
共通技能	日常生活が円滑に行える会話力 身近な内容の事柄について、また、必要な事柄の情報を収集し、それについて表出することの助けになる4技能。(読む・書く・聞く・話す)	
個別技能	各学習者の専門分野、ニーズに応じて、(ビジネス・報道・研究・通訳など)4技能を個別に伸ばす	大学課程で専門科目を学習していくに足るだけの日本語力の獲得。学内における講師・学生・大学職員との間での円滑なコミュニケーション、専門知識の獲得、資料の収集、ゼミへの参加、研究発表、レポート・論文の作成に必要な4技能の獲得。

留学生に特に求められる個別の言語4技能(話す・聞く・書く・読む)は、次のようにまとめられる。

表2 留学生に必要な4技能のトレーニング

対象技能	特に求められる技能	目的
書 く	要約をする	ノートをとる レポートを書く 論文を書く
読 む	速読をする	専門書の読解 資料を調べる
聞 く	要点を聞く 相手の話を正確に聞く	講義を聴く 発表を聞く 討論を行う
話 す	意見をまとめて述べる	ゼミ等で発表する

表2の「特に求められる技能」は大学進学後の段階での最終目標でもあるが、留学生別科の段階で徐々に身につけていかなければならない技能であり、この段階での最終到達目標でもある。

各技能の訓練はそれぞれ個別の練習、独立した練習によって行われるものではない。例えば

「ノートをとる」という作業は、単に「何かを書く」という作業ではなく、「まとまった長さのある話を聞き、理解し、それをまとめ、文字として記録する」という連続した作業の結果である。従って、「ノートをとる」ための訓練は単に「書き取り・ディクテーション」の訓練をするだけでは不十分で、聴解のトレーニングに始まり、長文の要約、文字による表現練習という総合的なものが必要になる。

また、「自分の意見を発表する」という場面では、卑近な話題について日ごろから考えている自分の考えを発表するというだけでなく、相手の話を正確に聞き、理解し、それについて自分の考えを即座に伝えるという「瞬間的な言語反応」が行えるようなトレーニングも必要になる。これは表1で記した、共通技能「日常会話が円滑に行える技能」より数段高度な到達目標といえる。

これらの目標技能は、ある語学レベルに達したら訓練を開始するというものではなく、最終の到達地点を頭に置きながら、各段階において、その段階の日本語力に応じたトレーニングを行っていくが必要になる。また、日本語学習の最終段階に入って初めて上記のようなトレーニングを個別に行っても総合力は身につかないものである。仮に語学学習段階を初・中・上級の三段階に分けるとしたら、すでに初級の段階から、「相手の話を正確に聞き、それについて適切な言語反応を行う」という訓練は大切であるし、また「聞いた話を自分の語学力を最大に利用し、要約し、伝える」という訓練は、レベルに応じた反応しかできないにしても各段階で十分に行えるし、それは欠かせないものである。上級の段階に入って、急に高度な目標のために特別なトレーニングを開始しても、うまくできるわけではないのである。

では、日本語をどの程度学習するとどんなことが具体的にできるようになるのであろうか。これをまとめたものが表3である。大学の授業で通用する日本語を獲得するためにはどの段階に達していることが望ましいのであろうか。

言語を用いてのコミュニケーションが円滑に進むためには、「理解する能力」と「表現する能力」が必要である。前者は「他からの情報を受け取り理解する力」であり、後者は「他に向け、自ら情報を発し、相手に伝える力」である。「理解する」ためには特に「読解」「聴解」の力が求められ、「表現する」ためには作文などの「書く力」と「発話の力」が求められるが、どちらの技能の獲得にも言語の四技能、「読む」「書く」「聞く」「話す」は欠かせないものである。表3で求めている日本語レベルの到達点は、「理解能力」と「表現能力」のどちらも習得した上で、実際の場面で日本語をどれだけ使いこなせるかという、「運用面」での能力の到達目標を示したものである。「運用する」ということは「理解する」ことに留まることなく、自ら発して「表現する」ことが求められるため、知識の習得以上のものが要求される。

日本語運用力の段階を仮に初級、中級、上級という三段階に分割したとき、その三段階の進行は階段状に一段ずつ上へと続いていくのではなく、切れ目なく連続して進行しているものと捕らえなければならない。また、初級はやさしい学習で、次の段階に進むにつれ、難しくなるという捕らえられ方がされることが多いが、初級とされる段階を適切に終えていれば、学習は連続線上を進んでいくのであるから、次の段階とされる場所に進んでも、特別に難しいと感じることはないはずである。正しく、適切に中級段階を終了していれば上級という段階に進んでも急に学習が困難になることもないであろう。それぞれの時期で学習する項目や学習方法は

表3 日本語運用能力段階表

IV段階 (日本語を使って研究・活動ができる段階)		*クラス
+	◇日本人と同程度に日本語が使える。 ◇裏付けのある意見が言え、議論・意見交換・交渉・説得ができる。 ◇込み入った人間関係に対応した言葉遣いができる。 ◇すべての場面で抽象的・専門的な議論がこなせる。	
0	◇公式な場で日本語を使って普通の作業ができる。 ◇微妙な表現は知識としてはあるが、まだ十分に使えないため複雑な状況、特に人間関係や感情面に配慮しなければならない状況の処理は難しさを伴う。 ◇抽象的・専門的な議論もできるが、言いよどみや詰まったりすることが多い。	
-	◇複雑で微妙な言い回しの日本語を特に要求しない作業であればできる。 ◇抽象的な話や、論理的に議論する能力はまだ不十分である。 ◇いろいろな場面で具体的な事実関係が扱える。	I
III段階 (同級生や友人と日本語で仲間うちの活動ができる段階)		
+	◇日常的で個人的に知っている場面の具体的話題が扱える。 ◇日常的な場面では意思の疎通が図れ、仲間内の連絡や話し合いに支障はない。 ◇基礎的な表現以上のものや抽象語は習得段階である。	H
0	◇単純な連絡は問題なくできる。 ◇込み入ったものは聞き返しや確認が必要である。 ◇学内の私的な交流に特に大きな問題はない。	G F
-	◇つかえたり聞き返したりして苦勞しながら仲間内の作業ならできる。 ◇学内の連絡などは何とかわかるが、確認が必要である。 ◇公式の場での仕事には不十分である。	E D
II段階 (自分の身の回りのことがサバイバル的にできる段階)		
+	◇道を聞いたり買い物などの日常的で身近な事柄であれば何とか処理できる。 ◇注意して対応してくれる人となら半分ぐらい意思の疎通がはかれる。	C
0	◇日常生活の中で簡単な問題なら句や単語単位の日本語で処理できる。 ◇挨拶や簡単な自己紹介ができる。 ◇好意的な人と短い交流ならできる。	B
-	◇観光客的な片言ができる。 ◇簡単な挨拶ができる。	A
I段階 (日本語で何か目的があることをすることはできない)		
	◇I～IVまでの能力は連続的なものであるから、IVが能力がゼロという意味ではなく、例えばIV+は限りなくIII-に近い能力がある。 ◇IVの人も単語単位の挨拶や、ある特定場面の会話ができる可能性は大いにあるが、常に期待できる能力ではないため運用能力としては評価できない。	A

\* クラス(A～I)は留学生別科に置かれているクラスを示す。



確かに異なり、その内容を比較すれば上の段階で提示する項目のほうが難易度は高くなるが、学習進行の線上を適切に進んできた学習者であれば、急激に学習が困難になるという地点は特定できないはずである。ただし、進行のスピードは学習時間には正比例せず、ある時期でそのスピードが落ちることは当然のことといえるだろう。

では、仮に学習段階を三分割したときに、それぞれの段階で学習する内容や獲得を目標とする運用力はどのようなものが求められるであろうか。

表4 学習段階別の学習内容と運用力

段 階	内 容	目 標 運 用 力
初 期 (初級)	基本文型・基本語彙 言語的にコントロールされた教材	日常会話・自分や周りの事実関係について具体的に音声・文字で表現する。相手に自分の意志を適切に伝え、簡単なやり取りをこなす。
中 期 (中級)	具体的内容に加え、抽象的な内容 言語的に配慮がある教材 抽象語彙・慣用句・様々な文体	身近な具体的な話題だけでなく、抽象的な話題についても自分の考えを音声・文字で何とか表現できる。
後 期 (上級)	言語的コントロールが少ない教材・ 生教材(未知の語彙・表現が多い)	初めて出会った話題・内容について、自分の考えが音声・文字で表現できる。困難な場面に遭遇しても、適切な反応ができる。

言語クラスは初・中・上級と称せられることが多いので、その名称で表3の各段階を考えると、いわゆる初級に当たるのが、Ⅰ段階とⅡ段階である。Ⅲ段階のマイナスレベルは初級から中級へ移行する準備段階にあたる。Ⅲ段階のプラスレベルは上級と呼ばれる段階にそろそろ入ったかというレベルである。学習線上の速度で考えると、Ⅰ・Ⅱ段階は比較的速い速度で進行できるが、Ⅲ段階を適切にこなすにはⅠ・Ⅱ段階に比べかなり時間が必要である。

留学生別科において、大学での講義についていけるだけの日本語力を身につけることが目標であれば、少なくとも別科終了時にはⅢ段階のゼロレベルを終了していることが必要であろうが、それで充分であるとはいえない。講義を聴いてノートをとり、ゼミ参加の準備のために自ら資料を集め、まとめ発表する、どのページにも新出語彙・表現語句が必ず現れてくる専門書を速読、熟読し理解する、レポートを作成する、卒業論文をまとめる等、大学における学習が円滑に進められるためには、単に日常会話がうまくできるというレベルではなく、より高度な日本語運用力が求められる。従って、留学生別科を終了する時点で、学習者の日本語運用力は表3におけるⅢ段階のプラスレベルまで到達していることが望ましいと言える。

### Ⅲ 十文字学園女子大学留学生別科日本語コース

#### 1. クラス及び使用教材

表5にあるように、現在、十文字学園女子大学留学生別科の日本語コースは初級段階から上

級段階まで、クラス A～クラス I（9 クラスのうち 8 クラスを開講）の 8 クラス編成で構成されている。表 5 のクラス A～I は段階に応じて設定したクラスで、その右側に記した II～IV のレベルは表 3 に記した能力段階に対応している。また、初級～上級の段階は表 4 に記したレベルと同等のものである。表 5 に記した使用教材は、学習の中心となる、日本語文法、構文の習得のための「総合日本語」「日本語講読」という科目で使用されるものである。このほか、「文章表現」、「口頭表現」、「日本文化研究」等の各科目では、それぞれの目的に応じた教材が使用されている。

表 5 留学生別科日本語課程クラス及び各クラス使用主教材

クラス			主教材（総合日本語・日本語講読の各科目で使用）	
I	IV-	上級	日本を話そう	日本の社会と経済を読む 他生教材
H	III+	上級	上級で学ぶ日本語	日本語表現文型 500 他
G	III 0	中級	中級から学ぶ日本語	中級から学ぶ日本語ワークブック 他
F	III 0	中級	文化中級日本語 II 他	
E	III-	中級	文化中級日本語 I	文化中級日本語 II 他
D	III-	初中級	みんなの日本語 II	文化中級日本語 I 他
C	II+	初級	みんなの日本語 II	
B	II 0	初級	みんなの日本語 I	
A	II-	初級	みんなの日本語 I	

「総合日本語」「日本語講読」はいわゆる「文法・構文」を学習する総合的な日本語の学習科目である。ここでは「話す」「聞く」「読む」「書く」という言語の 4 技能をバランスよく修得することを目的としている。ただし、初級の段階においては、特に「話す」「聞く」という点に重点をおいて授業を進め、まとまったものを「書く」という授業は中級への橋渡しとなる D クラス以降で行う。これは、「初期の段階は音声による理解を深め、基本的な表現・語句を正しく身につけるといった基本的な訓練を徹底的に行う時期で、日本語で考え、日本語で表現す

表 6 各クラスのデザイン

クラス	科 目
I	日本語講読 II (10)・口頭表現 IX (1)・文章表現 VI (1)・日本文化研究 II (1)・問題演習 I (1)
H	日本語講読 I (10)・口頭表現 VIII (1)・文章表現 V (1)・日本文化研究 I (1)・問題演習 I (1)
G	総合日本語 VII (12)・口頭表現 VII (2)・文章表現 IV (1)・日本語問題演習 I (1)
F	総合日本語 VI (12)・口頭表現 VI (2)・文章表現 III (1)・日本語問題演習 I (1)
E	総合日本語 V (12)・口頭表現 V (2)・文章表現 II (1)・日本語問題演習 I (1)
D	総合日本語 IV (12)・口頭表現 IV (2)・文章表現 I (1)
C	総合日本語 III (12)・口頭表現 III (2)
B	総合日本語 II (12)・口頭表現 II (2)
A	総合日本語 I (12)・口頭表現 I (2)

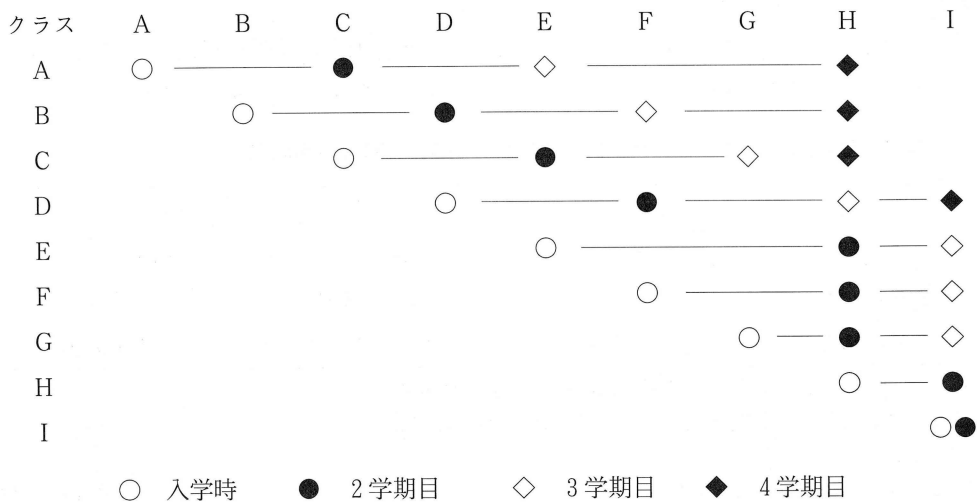
( ) 内の数字は 1 週間あたりのコマ数 1 コマ 90 分

るという習慣を早い時期から身につけるトレーニングの時期でもある」と考えるからである。そのため授業は媒介語を使わず「日本語」で進めることになる。さらに、「口頭表現」で「話す」「聞く」というトレーニングを各レベルに応じた内容で行う。

Hクラスまでで中級から上級へ移行する段階の一通りの文法・表現の学習を終え、Iクラスでは大学の授業を意識し、できるだけ生の教材を用い、自分で調べ、考え、まとめ、そして的確に表現し発表するという訓練を重視し、授業を進めている。

#### 図1 クラスの進級モデル

各クラスの進級は、以下に示すように通常、A→C→E→H→Iクラス、または、B→D→F→H→Iクラスというように学期ごとに上の段階へと進んでいく。



## 2. クラスサイズ

次に、各クラスの構成人数は何人が適正であるかという点に触れてみたいと思う。

表7 人数の多少によるクラス運営の長所・短所

サイズ	長 所	短 所
大クラス (20名以上)	一度に大勢に情報が伝達できる	一人ずつの練習時間が減り、注意が散漫になる 教師の目がクラス全員に行き届かない 個人が発話する時間が少ない
小クラス (5名以下)	各人の練習時間、発話時間が増える クラス内の意見交換が活発にできる	学習者が自分のレベルを他者と比べにくい 意見、話題に広がりやすくなりやすい

クラスサイズが大きい場合、いわゆる講義形式の語学授業であればクラス運営が可能ではあるが、学習者は教師の話を一方的に聞くだけで、その場では理解できたつもりになっても、実

際に学習したことを運用する練習まではできず、ごく一部の積極的な学習者を除いて受動的な学習に終わる傾向がある。実際に、クラスサイズ 20 名以上で授業が行われているケースもあるが、教材に基づいて教師が解説を加えていくという授業形態でのクラス運営は可能であろうが、日本語の「理解能力」だけでなく、「表現能力」をも高めていこうとすることには無理があるだろう。英語の検定試験や日本語の能力試験の対策講座などは、その目的からいっても一方的な講義形式の授業で支障がなく、大きいサイズのクラス運営が可能であるが、4 技能をバランスよく身に付けていくという目的のもとでは、大人数のクラスは避けた方がいいと言える。

一方、個人教授に近いような少人数のクラスは、各学習者の練習時間が増え、発言の機会も増すので、効率の良い授業が行えそうであるが、教師が学習者のレベル・ペースに合わせてしまうという危険もあり、また、学習者間の競争意識も減り、時として緊張感が薄れてしまう恐れがある。

では、どのぐらいの人数が適当といえるのであろうか。上記の長所・短所を考えると、クラスサイズ 8～10 人というのがグループレッスンで望ましいサイズではないかと考える。

表 8 本校留学生別科の総合日本語クラスでの学生一人あたりの発話可能時間

	20 名クラス	8 名クラス	差
1 コマあたり	4.5	11.25	6.75
1 ヶ月あたり	216 ( 3.6)	540 ( 9.0)	324 ( 5.4)
1 学期あたり	756 (12.6)	1890 (31.5)	1134 (18.9)

☆ 総合日本語の 1 学期は合計 168 コマの授業がある

☆ 表内の数字の単位は分、( ) 内の数字単位は時間

上記の表はやや単純な計算ではあるが、クラス内で一人当たりの「持ち時間」を単純に分割した場合、どのぐらいの「持ち時間」が可能かを算出したものである。「持ち時間」という考えは、例えば「ある楽器のグループレッスンで、一コマの中で一人の学生に対し、教師が集中してレッスンが行える時間」という考えに等しい。一学期あたりの総時間を比べてみると、20 名のクラスでは学生一人当たりの持ち時間は 12.6 時間であり、これは 8.4 コマ分の時間に相当する。一方、8 名のクラスでは一人当たり 31.5 時間でこれは 21 コマ分の時間にあたる。この時間を一人の学習者が発言可能な、あるいは、個別に練習できる時間と考えると、この二つのクラスの時間差というのは非常に大きい差であるといえるであろう。このことから、望ましいクラスサイズは 8～10 名であるといえる。

### 3. 配置クラスの決定

これまで、留学生別科としての最終到達目標、日本語の各レベル段階における運用力到達目標、クラスの分類、望ましいクラスサイズ等について述べてきたが、最後に、各学習者をどの段階からスタートさせるか、また、最も適合したクラスはどこであるかを決定する配置クラス決定テストについて、十文字学園留学生別科のプレイメントテストを例に取り上げていきたいと思う。

配置クラス決定テスト（プレイスメントテスト）の目的は、クラスに同レベルの学生を集めることにある。ある特定の言語プログラムやカリキュラムと密接に結びついて、学生をグループに分けることが目的である。従って、その試験内容はカリキュラム内容と関連づけられており、非常に狭い範囲の内容と関連した能力を評価する。カリキュラムに沿った学習内容のうち、どの部分が既に習得済みで、どれが未修得のものかを判定することによって、学生のレベルをグループ化するので、使用教材、学習項目に密接に関係し、カリキュラムごとにその内容も変わってくる。

これに対し、熟達度テストは、より広範囲の内容に関する一般的な言語能力測定テストであるため、あるコースのカリキュラムや使用教材とは関係なく、学習者が既に獲得している一般的な言語能力を測定することになる。

#### 4. 留学生別科配置クラス決定テスト

##### (1) 目的

留学生別科では配置クラス決定テストを年二回実施しており、その各テストの目的は表9で示すとおりである。

学習者は入学時にまず第一回目の配置クラス決定テストを受ける。その後、半年経過したあとで、同様の配置クラス決定テストを受験する。前者のテストは、入学時の学生の入学クラスを決定するために行われるプレイスメントテストとしての機能を持つ。後者のテストは配置クラス決定テストの役割と同時に、前の半年でどの程度の学習項目が習得できたかを知る到達度テストの役割も担う。その結果は、進級先に予定されているクラスが適切な段階のものかどうかを判断する判定基準となる。

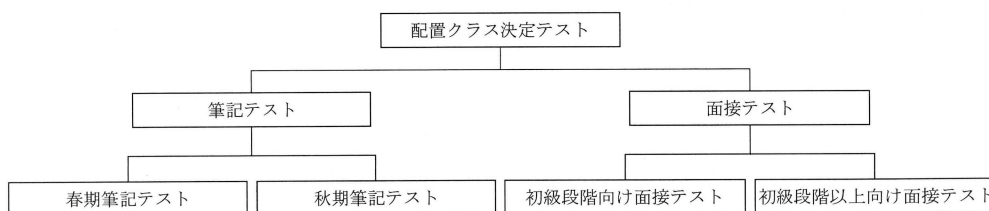
表9 留学生別科配置クラス決定テストの目的

	春学期配置クラス決定テスト	秋学期配置クラス決定テスト
春入学者	配置クラス決定	配置クラス決定・到達度測定
秋入学者	配置クラス決定・到達度測定	配置クラス決定

##### (2) 配置クラス決定テストの構成

現在行われている配置クラス決定テストは筆記試験と面接試験の2部構成になっている。構成は図2に示すとおりである。

図2 配置クラス決定テストの構成



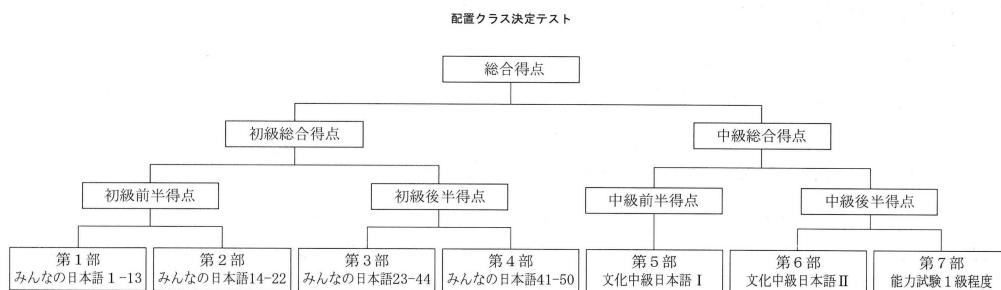
配置クラス決定テストは筆記試験と面接試験からなり、筆記試験は春学期、秋学期それぞれ異なる試験が行われる。また、面接試験は筆記試験の結果をもとに、日本語レベルが初級の段階にあるか、またはそれ以上のレベルにあるかによって学生をグループ分けし、それぞれに適した形式で行われる。

### (3) 配置クラス決定テストの内容

#### 〔筆記試験〕

筆記試験問題は7部から構成されており、問題はすべて留学生別科日本語課程で使用される文法教材の内容に準拠している。それぞれのテキストをクラスの授業カリキュラムにあわせ分割し、そこで学習する項目に合わせ問題を作成する。

図3 配置クラス決定テスト 筆記試験構成



問題の形式は多肢選択テストを中心に構成されている。テスト項目は資料1で示すように、文型、機能語、助詞、語彙(形容詞、副詞、接続詞)の理解を問う問題を中心に出题されている。テストは平成13年春期より実施されており、春、秋で試験問題が異なるが、問題の内容は同程度のものである。ただし、初回の平成13年春の問題数は他に比べ少なくなっている。各レベルに対応する問題項目数は表10で示すとおりである。

#### 別科日本語課程文法使用教材

初級課程	みんなの日本語 I	スリー A ネットワーク
	みんなの日本語 II	スリー A ネットワーク
中級課程	文化中級日本語 I	文化外国語専門学校
	文化中級日本語 II	文化外国語専門学校

表10 配置クラス決定テスト 筆記試験問題項目数

年度	初級前半	初級後半	初級合計	中級前半	中級後半	中級合計	合計
H13 春	44	47	91	13	12	25	116
H13 秋	44	47	91	21	26	47	138
H14 春	44	47	91	20	24	44	135
H14 秋	44	47	91	21	26	47	138

また、問題作成の難易度の基準となるものは表 11 で示すとおりである。初級段階の学習レベルを測る問題は、別科初級段階で使用している文法教材「みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ」に準拠し、中級以上の学習レベルを測る問題は別科中級段階で使用する「文化中級日本語Ⅰ、Ⅱ」の学習項目に拠る。問題は第 1 部～第 7 部で構成されており、第 1 部は初級前半から始まり、一段階ずつ上のレベルの問題が順次提示される。

表 11 配置クラス決定テストレベル別問題

	初級前半		初級後半		中級前半		中級後半
	1 部	2 部	3 部	4 部	5 部	6 部	7 部
みんなの日本語	1～13	14～22	23～40	41～50			
文化中級日本語Ⅰ					1～8		
文化中級日本語Ⅱ						1～8	
日本語能力試験 1 級							1 級程度

☆ 数字は課を示す

みんなの日本語Ⅰ 第 1 課～第 25 課

みんなの日本語Ⅱ 第 26 課～第 50 課

文化中級日本語Ⅰ 第 1 課～第 8 課

文化中級日本語Ⅱ 第 1 課～第 8 課

参考として、平成 14 年春期の筆記試験問題より第 2 部の一部を以下に記す。問題形式は多肢選択肢問題、語彙群から適当な語を選ぶ問題、反対語を記入する問題などである。

#### 資料 1 平成 14 年春期配置クラス決定テスト(抜粋)

##### 【第 2 部】

問題Ⅰ ( ) の中にどんな言葉を入れたらよいか。□の中から最も適当なものを一つ選びなさい。不要な場合は X を選びなさい。言葉は何度でも使えます。

a は	b が	c と	d も	e に	f を	
g で	h へ	i より	j まで	k や	l の	m X

- 私は木村さん ( ① ) 日本語を教えてくださいました。
- 毎日、8 時の電車 ( ② ) のります。
- 荷物が重いですから、車 ( ③ ) いきましょう。
- これは去年、妹 ( ④ ) 香港で買った服です。
- 神戸 ( ⑤ ) 大きい地震 ( ⑥ ) ありました。

問題II ( )の中にどんな言葉を入れたらよいか。下の a ~ f の中から最も適当なものを一つ選びなさい。

1. 明日は先に食事を ( ) から、映画をみましょう。  
 a する            b した            c して  
 d した            e しない        f するだ
2. おそいですから、今すぐ家に ( ) ければなりません。  
 a かえれな        b かえってな    c かえりな  
 d かえな           e かえらな      f かえろな
3. 私の趣味は散歩を ( ) ことです。  
 a します          b しり            c する  
 d した            e して            f しる
4. 日本に ( ) 前に日本語を勉強しました。  
 a きた            b きて            c きる  
 d くる            e きた            f こない
5. 日曜日は友達に ( ) します。  
 a 会ったり        b 会いたり      c 会い  
 d 会いに          e 会う            f 会って

問題V ( )の中にどんな言葉を入れたらよいか。□の中から最も適当なものを一つ選びなさい。

- |       |        |        |        |
|-------|--------|--------|--------|
| a それが | b そして  | c けれども | d それなら |
| e では  | f ですから | g と    | h それに  |

1. 明日は試験です。( ) 今晚、うちで勉強します。
2. 今日の授業は終わりです。( ) また明日。

問題VI 例のように次の言葉の反対の意味の言葉を書きなさい。

例 (たかい → やすい)

1. (あかるい → )

また、次に掲載するのは、実際の試験で使用される採点表である。この表で、各部の四角内に書かれている項目(助詞、動詞、副詞など)が問題で問われる。このうち動詞については文型、構文について出題している。



資料2 配置クラス決定テスト 筆記試験採点表

プレイズメントテスト採点表(別科用)

レベル (課)

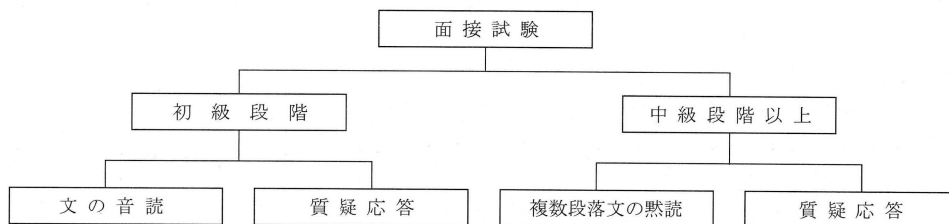
問題	I	II	III	IV	V	VI	VII	小計
【第1部】 初級前半 (1~13)	助詞 /6	動詞 /4	副詞 /2	疑問詞 /2	接続詞 /2	形容詞 /2	カタカナ /2	20
【第2部】 初級前半 (14~22)	助詞 /6	動詞 /10	副詞 /2	疑問詞 /2	接続詞 /2	形容詞 /1	カタカナ /1	24
【第3部】 初級後半 (23~40)	助詞 /6	動詞 /15	副詞 /4					25
【第4部】 初級後半 (41~50)	助詞 /6	動詞 /10	副詞 /4	接続詞 /2				22
【第5部】 中級前半 (文化I)	助詞 /6	機能語 /9	副詞 /4	接続詞 /2				18
【第6部】 中級後半 (文化II)	助詞 /6	機能語 /8	副詞 /4	接続詞 /2				20
【第7部】 中級後半 (1級)	機能語 /3	副詞 /3						6

初級前半 (1~22)	44
初級後半 (23~50)	47
中級前半 (文化I)	21
中級後半 (文化II)	47
中級後半 (1級)	26
<b>合計</b>	<b>91</b>

## 〔面接試験〕

図4 面接試験の構成



面接試験は、受験者のレベルに応じて、用意された二種類のテストから一つ選んで行う。初級レベルの学習者に対しては、仮名(ひらがな・カタカナ)が読めるかどうかを調べるため、以下に示すようなひらがな、カタカナで書かれた、2～3センテンスからなるカードを音読させる。その後、質疑応答として、資料4に示すような質問を口頭で行う。質問の内容は、初級の段階で学習する文法項目に準拠する。どの段階の質問を課すかは、受験者の筆記試験の結果による。

## 資料3 面接試験用に用いる初級段階の音読カード

<p>まいあさ お あさはん まえさんぽ 毎朝、6時に起きて、朝ご飯を食べる前に散歩をします。</p> <p>さんぽ あと 散歩の後、ジュースを飲んで、テレビのニュースを見ます。</p>
<p>あした たんじょうび たんじょうび 明日はスミスさんの誕生日です。私はデパートで誕生日の</p> <p>プレゼントを買いました。あした明日、スミスさんにあげます。</p>

上のような内容のカードを5種類用意し、面接の始めに受験者に音読させ、仮名が読めるか、また、音読がどの程度流暢にできるかなどを判定する。初級者に対する質疑応答の項目は次に示すとおりである。

## 資料4 初級者に対する面接質問項目一覧

クラス	課	文 型	備 考
A	1	➤ ～は～です	
	2	➤ これ/それ/あれ ➤ 所有の「の」	
	3	➤ ここ/そこ/あそこ	
	4	➤ 今～時です ➤ ～時に verb 起きる/寝る/働く/勉強する ➤ 時制/過去	
	5	➤ ～へ行く/来る/帰る ➤ 交通手段「で」 ➤ (人)と	
	6	➤ ～を verb(他動詞) 飲む/食べる など ➤ (場所)で「動作」 ➤ 誘い表現 ましょう/ませんか	
	7	➤ ～に～を あげる/もらう/書く	
	8	➤ 形容詞 現在形 ～は～です ➤ 形容詞+名詞	
	9	➤ ～は～が わかる/好き ➤ ～から, (理由)	
	10	➤ (場所)に～が「存在」 ある/いる ➤ ～は(場所)に「存在」	
	11	➤ (場所)に～が(数) ある/いる ➤ ～は(場所)に(数) ある/いる	
	12	➤ 形容詞 過去形 ➤ 形容詞+名詞 過去形 ➤ ～は～より (比較) ➤ ～が一番～ (最上級)	
	13	➤ ～は～が ほしい ➤ ～は～を verb たいです ➤ ～は(場所)へ verb に行きます	
B	14	➤ て形 ➤ ～てください ➤ 今～ています	
	15	➤ ～ても いいです ➤ もっています/住んでいます/結婚します	
	16	➤ ～て, ～て ➤ ～てから～ます ➤ ～は～が 大阪は食べ物おいしいです ➤ 形容詞 くて/で	
	17	➤ ないてください ➤ なければなりません ➤ なくてもいいです	
	18	➤ ～することができます ➤ ～は～することです ➤ ～の/するまえに, ～します	
	19	➤ ～したことがあります ➤ ～したり, ～したり ➤ ～く/になります	
		➤	

質問項目はカリキュラムに沿って並べられており、受験者が何が理解でき、また何が理解できないかを口頭で調べ、レベルを判定する。

一方、筆記試験の結果、初級段階は終了していると考えられる受験者に対しては、以下のような面接試験を行う。

黙読課題 「速読用の文化エピソード 日本語中級」(凡人社)より

1. 乗り物の中の日本人
2. 皿洗いと子供たち
3. 学歴と結婚
4. 日本人とタバコ
5. 左利き

上記の教材の中から話題を選び、それぞれ300字から400字(2段落から3段落)程度の読み物を黙読させ、内容について確認した後、それに関連する話題を中心に受験者に意見、考えを述べさせるという口頭試験を行う。

#### (4) 試験結果とクラス決定の関係

資料1のように、筆記試験の問題は各コースの学習内容に沿って第1部から順に提示されている。試験は第1部から第7部まであり、各コースの学習内容と関連付けられ出題される。

従って、例えば第1部の正答率が50%で、第2部以降の問題に対する正答率が極端に低ければ、その受験者は別科コースで行われる授業の第1部の内容については、すでに学習した経験があると考えられる。このように、各段階、及び、初級前半・後半、中級前半・後半の正答率を算出することでその学生が既に学習しているであろう項目とコースでの授業内容との照らし合わせを図る。ただし、各受験者の学習の背景にあるいろいろな教授法、使用教材や学習期間により、カリキュラムもまちまちであるため、受験者が必ずしも別科で行われるカリキュラムと同じ提示順で学習してきたとは限らない。学習した内容がきれいに整理され、保持されている受験者もいれば、虫食い状態で学習事項が記憶されている受験者もいる。この点は、特に初級レベルにある学習者にとっては配置クラス決定後も授業内容との間で学習上の問題点となることが多い。そこで、筆記試験だけでは測りきれない日本語能力を面接試験で補うことになる。面接を行うことで、日本語運用力の確認をし、最終的な配置クラスを決定する。クラス決定後も実際に学習者がクラスレベルに合っているかどうか、1週間のうちに変更、修正を行う。

#### IV おわりに まとめ・今後の課題

十文字学園女子大学留学生別科の日本語コースを例に、留学生別科としての「最終到達目標」「コースデザイン」について述べてきたが、それをここで要約すると以下のようにまとめられる。

## 1. 最終到達目標

大学の講義を聴き、理解し、要求される作業をこなすことができる日本語運用力を身に付けることが留学生別科の最終到達目標となる。これは、単に日本語の知識を習得するだけでなく、実際に現実の場面で運用できる段階に届くことを目標とする。単に日常会話がだいたいこなせ、コミュニケーションがうまくとれるというレベルに留まらず、卑近な話題以外についても、初めてであった事柄についても自分の考えを音声や文字で表現できるというレベルにとうたつすることを目指すのである。また、現実の場面で、日本語に関係する困難な場面に会ったときも、自分の力でそれを解決していけるだけの方策も身につけることも目標になる。

## 2. コースデザイン

上記の最終目標に到達できるよう、クラスは適正な少人数であることが望ましく、授業内容も講義ではなく、実際に使える日本語が身につくよう、媒介語を用いず、日本語で考え日本語で反応できる力を獲得できるような教授法で進めることが求められる。一年間で運用力がいわゆる「上級」とされるところまでに到達するためには、別科入学時に少なくとも中級への準備が終了している段階（「初中級」）であることが望まれる。本校留学生別科のクラス名で言えば、入学時にEクラスの段階にはいり、卒業時には少なくともHクラス段階を終了していることが望ましいといえる。

また、適切な学習を行うためには、適切なクラスに学生を配置しなければならず、配置クラス決定テストは重視されるべきテストであり、正しい配置決定がなされなければならない。

## 3. 今後の課題

適切なクラスに入学し、効果的な授業を行い、全員に大学生として学習できるだけの日本語運用力を身につけさせ、次の段階に送り出すという作業が留学生別科の目標であるが、このためには今後、入学してくる学生のレベルのばらつき、特に下方へのレベルの偏りに対しどのように対処するか、また、受け入れ側の大学がどの程度の日本語運用力を実際に期待しているのかを再調査すること、配置クラス決定テストが正しく機能しているか、テストの適性を調べること、さらに授業カリキュラムが上記目標達成のために最適であるのかを検討すること、留学生別科の卒業生がその後「日本語」に関して、言語的にどのような問題を抱えているかを調べ、留学生別科のカリキュラムにどのような改善が必要かを再考すること試験結果とクラス決定の関係などが今後の課題として挙げられる。

### 参考文献

1. 木村宗男「日本語教授法 ー研究と実践ー」(1982) 凡人社
2. 木村宗男, 阪田雪子, 窪田富男, 川本喬編(1989) 「日本語教授法」 おうふう
3. 石田敏子「日本語教授法」(1995) 大修館書店
4. 岡崎敏雄, 岡崎眸「日本語教育の実習 ー理論と実践ー」(1997) アルク
5. 石田敏子「入門日本語テスト法」(1992) 大修館書店
6. J. D. ブラウ著, 和田稔訳「言語テストの基礎知識」(1999) 大修館書店

7. 牧野誠一, 鎌田修, 山内博之, 斎藤真理子, 萩原稚佳子, 伊藤とく美, 池崎美代子, 中島和子「ACTFL-OPI入門」(2001) アルク
8. 牧野誠一監修, 日本語 OPI 研究会編 翻訳プロジェクトチーム訳「ACTFL-OPI試験官養成マニュアル」(1995) アルク
9. 日本語教育学会編 「日本語教育事典」 (1987) 大修館書店
10. 日本語教育学会編 林大, 大坪一夫, 福地務, 村上隆編「日本語テストハンドブック」(1991) 大修館書店
11. 日本語教育学会編 「日本語教育ハンドブック」(1990) 大修館書店